

經濟論叢

第164卷 第3号

-
- 情報経済学の可能性……………吉 田 和 男 1
- 韓国の30大財閥と「企業グループ」……………鄭 安 基 32
- 転換期における中国の自動車流通システム……………劉 芳 62
- イギリス公務部門の人事管理変化と
ホワイトカラー組合の機能（1）……………松 尾 孝 一 84
- 廃棄物広域処理の経済性と財政構造（1）……………八 木 信 一 105

学 会 記 事

平成11年9月

京 都 大 学 経 済 学 会

【学会記事】

ピーター・テミン教授講演会

1999年6月26日の午後4時から6時まで、法経北館会議室において、経済成長論および比較経済史の分野において国際的に著名な研究を多く発表されてきたマサチューセッツ工科大学の経済学部のピーター・テミン教授を招いて特別講演会が開催された。テミン教授はアメリカの経済と産業、特に鉄鋼業、薬品産業、電話事業等の構造と発展に関する諸研究をされ、また大恐慌の原因をめぐるフリードマンやシュウォーツらのマネタリストとの論争でも高名な研究者である。なお、当日は大阪学院大学の安場保吉教授が討論者として特別に参加された。

テミン教授の講演のもととなる「戦後ヨーロッパの高度経済成長の再検討」と題する論文は、1999年度のオクスフォード大学のヒックス記念講義のために執筆されたものであり、第2次世界大戦後のヨーロッパ経済の高成長に関して、部門内の生産性の上昇、部門間の資源の移動といった諸要因を、近年論争になっている生産性の国際的、歴史的な収斂傾向との関わりで論じたものである。

この論文ならびに講演において、著者は第2次世界大戦直後から1973年の第1次オイル・ショックにいたるまでのいわゆる「ヨーロッパ経済成長の黄金時代」をもたらした要因のうち、現在まで見過ごされがちであった農業部門から広い意味での工業部門への経済資源、特に労働の移動の趨勢に着目している。すなわち、第1次大戦に始まるほぼ30年間の戦争という非経済的要因や大恐慌という経済的要因によって、世界貿易の発展が遅延したり、国際的な経済資源の移動が妨げられ、結果として通常の経済成長のパターンとベースが維持されていなかった。特に、ヨーロッパの諸経済は当時の経済発展の一般的な水準を考慮すると、農業部門の経済に占める比重が理論的に推定されるレベルより高いままに留まっていた。

このような正常な経済成長にとっての阻害要因が、第2次世界大戦の終結によって除去され、累積されていた様々の不均衡が一挙に解消されるメカニズム、特に部門間の資源配分の均衡状態が回復するという作用が働いた。この歴史的な経済発展の加速要因が、一般的な成長要因に上乘せられ、その結果として1940年代後半からヨーロッパ経済は長

期に渡って全般的に高度成長を実現した。ただし、この一過性の限定的な要因は1970年代の前半ではほぼその現実的な影響力を失い、オイル・ショックという外生的な要因も加わり、ヨーロッパ経済の長期成長は終わりを迎えることになった。

安場教授は、テミン教授の供給サイドの要因を重視するアプローチを容認しながらも、需要サイドの諸要因がヨーロッパ経済の長期成長に貢献したことを正当に評価することを強調した。他の参加者からは、テミン教授が用いた回帰分析の技術手法とその結果の解釈をめぐる質問が出され、さらに、制度的、構造的要因を考察しないことから生ずる歴史解釈の妥当性に関わるコメントがなされた。この講演会は、大学院生、学部学生、さらには他学部の教官を含めて、約60名が参加するという盛会であり、知的好奇心をかきたてる講演と活発な討論が展開された有意義なものであった。

(曳野 孝)